



祝 100 回 片マヒ自立研究会の皆様との「出会い」

細田 満和子

(NY市・コロンビア大学研究員) サクラ

この度は、片マヒ自立研究会 100 回目を迎えられまして、おめでとうございます。本当に、100 回もの研究会を行ってきたというのは、並大抵のことではありません。継続してこられた皆様のご努力に敬意を表します。

私がこの研究会を知ったのは、2002（平成 14）年 12 月に、森山さんとお会いしたことに端を発しています。当時、病いや障害を持ちながら生きるということをテーマに、博士論文を書こうと調査しており、荘道社という出版社によるリハビリテーション研究会に参加しました。その時、ゲスト・スピーカーとしてお話をなさっていた森山さんと知己になりました。そして、この会のことをご紹介していただき、2003（平成 15）年 1 月から 6 月まで、ほぼ毎月、参加させていただきました。

研究会で話される内容は、それぞれの近況や心に残った本の感想といったものから、復職や社会参加、会報の編集、行事企画をテーマにした各種分科会の活動報告まで多岐に渡り、熱気にあふれる議論が繰り広げられ、いつも圧倒されておりました。

そのような中で、ある時、私にも発表の機会が与えられたので、拙い初期の段階の草稿を発表させて頂きました。

ところが、この発表は散々なものでした。

ある会員の方からは、「細田さんは、障害者とおっしゃるけど、どういう人を指しているのですか？ 指が 1 本無ければ、障害者ですか？ 歩けなければ障害者ですか？」と詰問され、身がすくむ思いがしました。

しかしながら、この経験は、障害者という言葉でひとくくりにはできない、ひとりひとりの個別な〈生〉に、それまで以上に真剣に向かわなければならないことを決意させてくれました。

こうした経験があったからこそ、病いや障害を持ちながら生きるということをテーマにした研究が、一応の形となって、博士論文として認められ、やがて本として出版されるようになったのだと確信しております。

本の中で私は、病いや障害を持つようになって、〈生〉をかたどる各位相が危機の陥という新しい状況に直面した人と、支える人との「出会い」を論じました。それは、互いに互いを必要としつつ支え合うという関係性を築き上げ、病の後を「生きる」ために、各位相を再び統合させてゆく主体の「変容」をもたらすのです。

私も当時、研究と子育てを中心とする家庭生活の間でバランスが取れず、焦る気持ちだけが募って危機といってよい状況にありました。

そのような中で、この会をはじめ、病いや障害を持ちながらも、試行錯誤しながら自らの〈生〉を作り上げていらっしゃる皆様とお会いし、本当に多くのことを教えられました。

私にとって、これはまさに「出会い」だったと思っています。

片マヒ自立研究会の皆様と知り合え、時間と場所を共有できたことに、心から感謝を示すことで、第 100 回の研究会へのお祝いの言葉とさせていただきたいと思っております。